

軌跡

～私たちの700日～

復興祈願

酪農学園学生ネットワーク

はじめに

酪農学園学生ネットワーク（酪ネット）・現地派遣部門は東日本大震災直後に発足しました。学生の「何かしたい」「ボランティアに行きたい」という想いを、具体的にカタチにするという目的の下、大学、学生を中心にしたボランティア活動による支援体制を構築しました。

宮城県石巻市（現在は気仙沼市）と岩手県大船渡市を拠点に、現地で活動しているNPO・NGOと連携し、学生と教職員をボランティアとして派遣してきました。継続した被災地支援活動を目標に掲げ、今日に至るまでの約2年間、延べ約250人の学生・教職員が被災地に赴き、ボランティア活動に従事してきました。

東日本大震災直後に手探り状態で現地入りした先発隊から始まった酪ネットの学生ボランティア活動は、これまでの活動をまとめる必要があると考えました。

2012年度の活動が一区切りした今、これまで2年間の活動を通して、私たちが伝えていきたいこと、支援活動を考察して後世に伝えていくべく、この「軌跡～私たちの700日～」を作成しようと決心しました。

被災地支援は、さまざまなカタチがあります。実際に被災地に出向いて活動すること。被災地の現状や自分たちが感じたことを北海道で伝えること。被災地関連の募金をすること。被災地の方々と繋がりを保つこと…。

本誌も、その支援の一環になることが出来ればと思っています。被災地ボランティアの経験者が、何年か経った後に、本誌を読み返し「この時は被災地に行ったなあ」「気仙沼のあの人は元気かなあ」と、その時の想いを蘇えらせてほしいです。もし再び大きな災害が起きた時に、本誌が何かの役に立つことを願っています。

一時的な支援ではなく、継続した支援を。その時、感じていたかけがえのない想いを風化させないために、その役割を担えれば幸いです。

最後になりましたが、今日に至るまで酪ネットが活動してくることができたのは、応援・協力してくださった方々の存在がなければ達成されなかったと感じております。

心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

目次

はじめに

酪ネットの意義	1
気仙沼活動報告	2・3
大船渡活動報告	4・5
酪ネットコアメンバーの視点から考察	6
派遣メンバーの視点から考察	7
現地NPOスタッフから考察	8・9
大学教授視点から考察	10
大学職員視点から考察	11
被災地の方々からのお手紙	12
Thank you for heartfelt feeling	13



「酪ネットの意義」

酪ネット統括 河村 将 芳

私は酪ネットの活動の意義や意味をよく考えます。

酪ネットの活動が復興の役に立てたのか、支援として成り立っているのか、学生が講義を休んでまで現地でボランティアする意味はあるのか。きっと、それは本質的な問題で、考え続けなければなりません。

東日本大震災が起きて、津波が発生して、原発の問題があって、日本中が悲しみに覆われていました。今でも、そこに住んでいる人がいて、日々その問題と戦っています。政府、民間企業、NPO・NGOや、ボランティア団体が支援しようとさまざまな取り組みをしてきました。その中で酪ネットは、何ができたのでしょうか？ほんとに被災地や被災者の役に立っているのでしょうか？

ある人に、「支援は具体的な成果を実感するのは難しい。そもそも支援は、何が現地の人たちにとって正解なのか、ほんとにその人たちのためになっているのかは、何年も継続して活動していかないと見えてこない、考え続け、探し続けないといけない」と言われたことがあります。

正直、私にはまだわかりません。これからも経験と勉強が必要です。

ただ、それと同時に、確信していることが一つだけあります。

「何かできないか」「ボランティアに行きたい」という学生の思いがあって、最初は手探り状態で試行錯誤しながらでしたが、さまざまな人や団体の協力を得て、さまざまな想いを繋いで一つ一つのプロジェクトは達成されていき、2年間継続されてきました。

私は、その事実だけで十分価値があると思います。

キッカケは震災だったけれど、それは結果的に、誰かを笑顔にさせたり、勇気づけたりしました。特に学生にとっては、被災地という非現実的な環境に身を置くことで、普段の生活では味わえない感覚、達成感や充実感などある種の「生きがい」のようなものを得て帰って来ます。

NPO 法人アプカスの伊藤俊介さんが僕たちに見せてくれた動画があります。最初は1人の男性が踊っていたのに、その姿に共鳴され、一人、また一人と、一緒に踊り始め、最後は何百人と巻き込んで一緒に踊るというムーブメントを起こす動画です。その意味が少し理解できた気がします。

ムーブメントが起き続けている事実が価値があって、それで、みんなが笑顔になる。それは、それだけで素晴らしいことで、震災には人を突き動かす何かがあった。ただ、それだけのこと。極端に言えば「なんのために私は踊っているのか？」よりも、「わかんないけど、みんな踊ってて楽しいじゃん」ということです。

支援とは、ボランティアとは、この活動が復興に繋がっているのか、そもそも復興ってなんだ、その意味を考えていくことは、重要です。しかし、極端に言えば何が正解かはわかりません。

意義や意味だけに縛られるのではなく、これだけ人を突き動かす何かがあって、そこで人は楽しみ、悲しみ、泣いて、笑って、考えさせられて、悩んで、学んで、いろんなことがあって、その先も前を向いて生きていく。いろんな人が協力していき、何か大きなムーブメントが起きて、続いていき、その先の可能性が膨らんでいく。意義や意味は、その後から付いてくるのかもしれない。

私は酪ネットに携わることが出来てよかったと心から思っています。

本当に多くの方々に支えられて、酪ネットは2年間活動を続けてこれました。

この場を借りて、感謝申し上げます。ありがとうございました。

被災地の方々が笑顔で毎日の生活を送れていることを祈っています。

【宮城県 気仙沼市】

2012年 活動報告

気仙沼市の情報

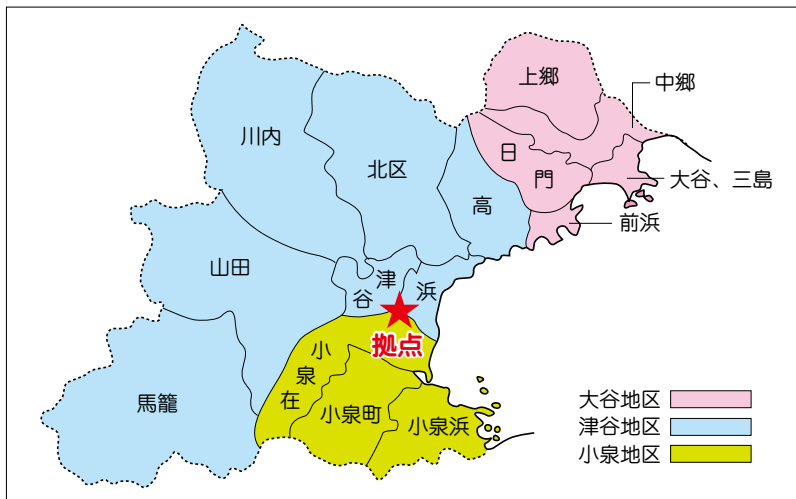


- 死者数：1,040人（身元不明者数：10人）（平成24年12月27日現在）
【気仙沼警察署発表】
- 行方不明者数：243人（市内 243人、その他 0人）
【気仙沼警察署発表】
行方不明者数は、気仙沼警察署に届出された人数です。
- 震災関連死認定件数（平成24年12月4日審査会時点）：104人
- 住宅被災棟数：15,728棟（平成24年11月30日現在）
- 被災世帯数：9,500世帯（平成23年4月27日現在・推計）

南三陸町

死者数：614人
 行方不明者：226人
 震災関連死認定件数：20人
 住宅被災棟数：4525棟

学生ボランティアが活動した地域（小泉・大谷・津谷）



2011年11月



2012年2月

- ▶ 人口1万人くらい（10,653人）。南側の気仙沼市の南側に位置する。
- ▶ 平成21年に、気仙沼市と合併。
- ▶ 大きく分けて3地区ある。
- ▶ 小泉、大谷、津谷。この拠点は津谷地区で、津波の被害規模が一番小さかった。
- ▶ （全壊：小泉／1118、津谷／175、大谷／1109）全体の被災世帯は3580。
- ▶ 本吉の死亡者は、75人。行方不明68人。
- ▶ 合計143人。

学生ボランティアの活動内容

仮設住宅は、スピードを重視して建設されたものが多く、また業者によって住環境の質に差があります。その差を少しでもなくすために冬の防寒対策や夏の暑さ対策などの住環境改善を行いました。

また、集会所の遊具を整備したり、明かりカフェなどのイベントを開き、交流する場を設けコミュニティ形成のお手伝いをしてきました。

・すだれの設置（7月）

仮設住宅内の希望者に暑さ対策としてすだれを設置



・すだれの撤去（11月～12月）

前期派遣学生が設置したすだれの撤去

・共同農園の整備（7～9月）

仮設住宅の方に貸し出している農園での作業、看板作りや草刈り、休憩所作成を行った



・共同農園の整備（11月～12月）

冬に向けて休憩所などの撤去や来春にむけての準備

・明かりカフェの実施（7～8月）

子どもたちと提灯等を作成、それらを夜点灯させ明かりを使ったイベントの実施



・集会所の遊具の整備（7～8月）

ブランコの錆取り、ジャングルジムのペンキ塗り



・屋上緑化（7月）

仮設住宅には緑が少ないので屋上などに草を植えた

・仮設住宅の防寒対策（9月）

住宅内の鉄の柱や壁の隙間に断熱シールを貼り、防寒や結露対策を行った

・仮設住宅の防寒対策（11月～12月）

前期に引き続き断熱材を壁などに貼り、防寒や結露対策を行った



【岩手県 大船渡市】

2012年 活動報告

【被災状況】

大船渡市			
人的被害	死亡者 340人	行方不明者	80人
建物被害	5,532世帯	全壊	2,787
		大規模半壊	430
		半壊	717
		一部損壊	1,598



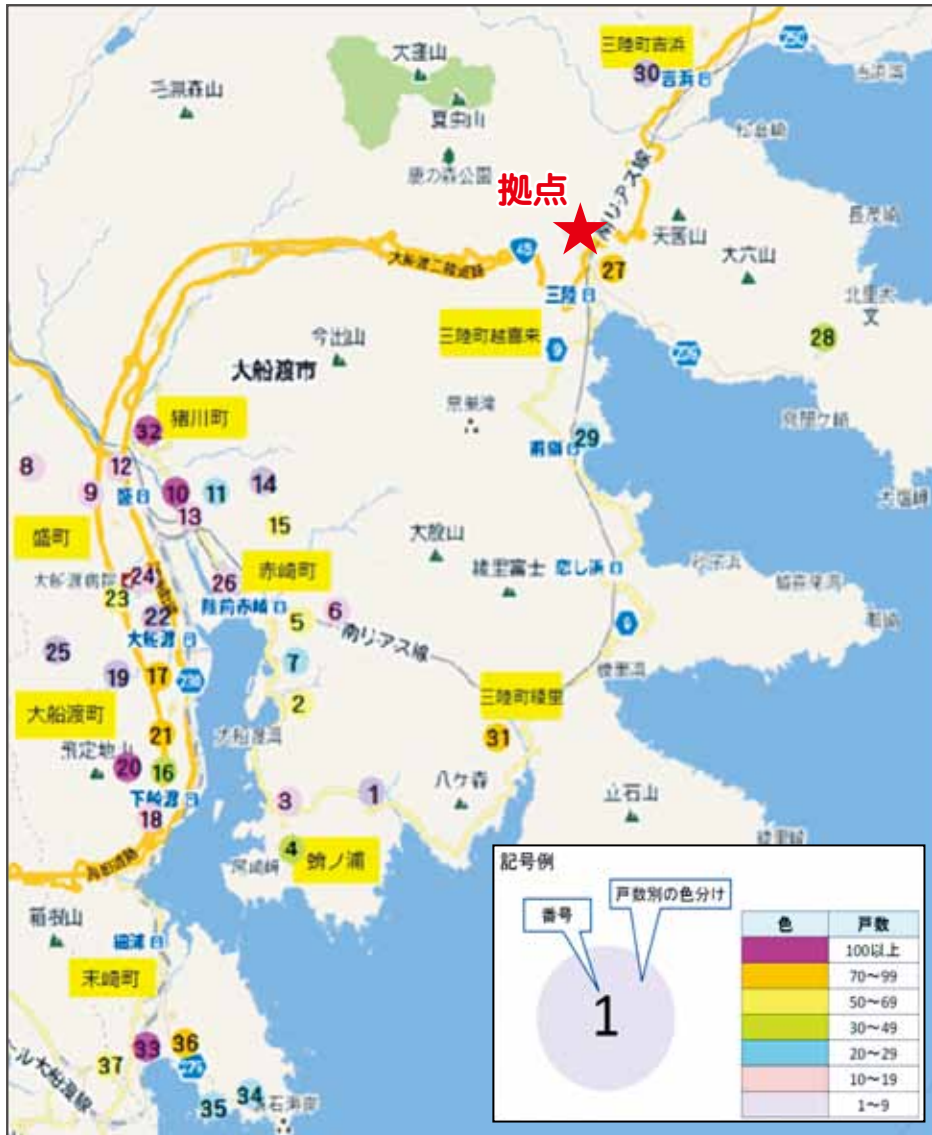
2012年7月

【活動を行った地域での被災状況】

	死亡者	行方不明者
赤崎町	43	17
大船渡町	104	41
猪川町		
末崎町	32	29



2012年12月



学生ボランティアの活動内容

震災直後はまず、被災者のニーズを把握するために、聞き取り調査を行いました、そこで見えてきたものが被災者同士のコミュニティ不足でした。そこでコミュニティ形成支援を目的とし、共同農園（友結ファーム）の整備やベンチづくりを行いました。また、上記の活動の評価と今後の支援活動に活かすため追跡調査も行いました。

■ 共同農園の整備

友結（ゆうゆう）ファームでは、農作業を通じ被害者同士が交流できる場であり、学生ボランティアは倉庫前に階段を作成したり畝看板やファームマップ作成、設置により利用者にとって使いやすい農園となるよう整備しました。



■ ファームマップ設置

ファームで活動している人のみならず、すべての訪問者がファーム内のどの畝に何が埋まっているのかがわかるようになっている。またマップにかかっている野菜カードには裏にその野菜の豆知識等が記載されている。

■ 聞きとり調査

今までの活動の評価、今後の支援活動、次なる大災害への効果的対応に役立つ学術的記録を目的として、2011年5月～7月に聞き取り調査を行った。同一の仮設住宅の住人へ生活やコミュニティの現状がどう変化したかの話を伺いながら調査しました。

◎聞き取り調査成果

	戸数（7月⇒12月）	入居者数（7月⇒12月）
池ノ森 ¹⁷	72 ⇒ 72	192 ⇒ 192
永 沢 ²⁰	138 ⇒ 138	372 ⇒ 372
山馬越 ²¹	88 ⇒ 88	221 ⇒ 221
大 田 ³³	134 ⇒ 134	345 ⇒ 345
平 林 ³⁶	70 ⇒ 70	159 ⇒ 159
山 岸 ³⁷	58 ⇒ 58	152 ⇒ 152



■ ベンチ作り

仮設住宅において大人2～3人サイズのベンチを作製しました。ベンチがあることで、住民が家の外で休むことができ、住民同士の交流の場となります。

また、ベンチ作りは仮設住宅地内で実施し、学生や住民と一緒に作業します。これによりベンチに思い入れが生じ、ただのベンチと比較し、より多くの利用が期待できるだけでなく、作製すること自体が交流の場となり、住民同士のつながりのきっかけとなります。

◎ベンチ作り成果

	戸数（7月⇒12月）	入居者数（7月⇒12月）
大 立 ²	65 ⇒ 65	204 ⇒ 204
鳥 沢 ⁴	47 ⇒ 47	182 ⇒ 182
前 田 ¹²	12 ⇒ 12	13 ⇒ 21
大 田 ³³	134 ⇒ 134	345 ⇒ 345
平 林 ³⁶	70 ⇒ 70	159 ⇒ 159
山 岸 ³⁷	58 ⇒ 58	152 ⇒ 152



酪ネットコアメンバー総括(気仙沼)

酪ネット 気仙沼調整・会計
環境マネジメント学科3年

中村かれん



今回、2012年度の活動報告書を作成するにあたり、コアメンバーの視点で文章を書くことになりました。そこで、今回は私がこの運営に携わるきっかけについて書きたいと思います。

私はもともと何かの団体に所属して活動する学生ではありませんでした。そんな私がどうして酪ネットの運営に関わるようになったのか。

それは大学2年生の5月に酪ネットの派遣で1週間ボランティアに行ったことがきっかけです。震災から2ヶ月あまりという時期での活動は想像以上に過酷で、被災地の現実と札幌で過ごしていた日常とのギャップにとても戸惑い、気持ちの整理がつかなかったことを覚えています。“今あるこの時間は今しかない・大事なひと、モノを失うのは一瞬”といった時間の大切さに気がつきました。

派遣された時期や活動場所など、状況によって思うことは人それぞれだと思いますが、もっと多くの学生がボ

ランティアを通して何かを得たり、自分自身を振り返るきっかけになればいいな、という思いから酪ネットの運営に関わることにしました。

活動の中でメンバーとの対立など、うまくいかないこともありました。現地でも活動した学生から「行ってよかった」「ありがとう」と言われるとそんな苦勞も吹き飛びました。

1週間という短い活動期間でしたが、私はその時に知り合った人とは何か“縁”があって出会ったのだと思っています。派遣が終わっても一緒に活動した仲間や東北で知り合った住民の方、拠点で知り合った人とのつながりをもち続けて欲しいと思います。

2012年度も無事に酪ネットの現地派遣を終えることができました。

酪ネットのメンバーや受け入れ先の団体や学校関係者など多くの人にお世話になりました。どうもありがとうございました。



東日本大震災ボランティアに携わって

酪ネット 大船渡調整
酪農学科4年

西井 亮太



私はこの震災を忘れないためにも「知る」ということが大切なことだと思いました。

ボランティア活動においては仮設住宅で聞き取り調査をしてわかった、「コミュニティ不足」を改善するためにツールとして掲示板やベンチを作り、共同農園の整備などを行いました。

復興するためには東北に住む人たちが自身が行動していくことが重要で、自然にコミュニティが作られる環境を作ることを私たちは大船渡市で行いました。その活動の中で、被災地を見て、仮設住宅を見て、住民の方と話したり、一緒に食事をしたり、子どもたちと遊んだりして、自分自身が現地に行くことでしか感じる事が出来なかったことがたくさんあったと実感しています。

この様な経験が出来たのは大学や酪ネットの力があつたからこそ実現できたものだと感じ、私は他の学生に被災地に行く機会を提供したいと思い、酪ネットメンバーになることを決意しました。

私は2011.5月、2011.12月、2012.6月と大船渡市で活動して確実に復興が進んでいることを感じました。そして、現地にいる人たちも訪れるたびに笑顔が増え、生きたいという意思の強さを感じました。瓦礫が山になり、分別され、無くなり、電柱がたち、信号がたち、プレハブ商店街ができ、仮設団地では人が歩くようになり、喋るようになり、イベントを行なうようになりました。

現地住民の人たちに参加した学生ボランティアの多くが、お茶をもらったりご飯をもらったりととても親切によくして下さって、人の温かさというものを感じたのではないのでしょうか。

今回の企画では市内で最大である長洞(ながほら)仮設団地に近隣する共同農園での活動がメインとなり、少

しでも多くの人に来てもらって仮設の住民同士がより交流する場ができるようにと看板を作ったり、階段を作ったり、芝刈りをしたりしました。

4週に渡り計22人の全員で作った環境はきっと素敵な交流の場になっていることでしょう。

酪ネットメンバーとして見えた課題としてはボランティアに参加する上での学生の意識と自発性をよりよくすることと、参加学生の募集の方法の改善でした。

学生の意識と自発性に関しては震災から一年がたったことや情報が少なくなってきたことによって薄れた感覚と、支援の多くがもはや素人では出来ないようなものばかりだったことが考えられます。

参加学生の募集の方法については、もっと広い範囲に酪ネットの存在、趣旨、内容を伝えるように広報していきたいかったということです。

課題もありますが、酪ネットの一員として活動にかかわることができて良かったと思えることもあります。その中の一つとして参加してくれた学生の多くが一年生であり、彼らは当時、「被災地に行って何かできることをしたい！けれど出来なかった」という高校3年生でした。そんな彼らに実際に現地に行ってボランティアをする機会を提供できたことは、この活動を続けてきてよかったと思えることです。

酪ネットの運営は本当にたくさんの人の協力があったからこそ実現できたものであり、協力がなければ決して実現できなかったものだと強く感じています。

酪ネットメンバー、酪農学園大学の教職員の方、顧問の高橋一教授、NPO法人APCASの伊藤俊介さん、堀池舞子さん、NPO法人チャイルド・ファンド・ジャパンの船戸義和さん、寄付金を下さったみなさま、参加してくれた学生、ありがとうございました。

少しでも早い東北の復興を願っております。

▶▶▶ 派遣メンバーの視点から考察 ▶▶▶

「東日本大震災の復興支援活動を通じて」

酪ネット 前統括
獣医学科6年 三木 康平



私は、「学生の自分が人のために何かできることはないか」と考え、今まで支援活動をしてきました。一昨年(2011年)の6月にいった岩手県大船渡市で一週間支援活動で復興には持続的な支援が必要であることを知り、その後半年間は学内で酪農学園大学学生ネットワーク(酪ネット)のメンバーとして学生の被災地への派遣の運営をしました。そして昨年の12月に再び大船渡市で一週間支援活動をしました。札幌圏内で活動している他の団体との話し合いや、外部への活動報告もしてきました。

私が地域や人のために、これほどまでに真剣に物事を考え、話し合い、悩みながらも行動に移すことができたのは、恥ずかしながら初めてだったと思います。正直つらい時もありましたが、同時にとても多くのものをいろいろな人から得ていたことに気がきました。現地の状況や課題、人との向き合い方、組織の運営方法、実行することの重大さなど学ばせてもらったことは数えたらきり

がありません。

この活動を通じて得たものを、社会人としてどのように育てて、具体的に還元するのかということが、これからの私の課題だと思っています。

最後にこの場を借りて、貴重な話を聞かせていただい大船渡の方々、学生を受け入れてくれたチャイルド・ファンド・ジャパン、アプカスの方々、活動を支えてくれた学校の教職員方、酪ネットメンバーに心より感謝します。



「震災ボランティアに参加して」

酪農学科4年 竹本 愛



私は2011年の5月と10月、2012年の12月の3度、岩手県大船渡市へ行った。私たちの活動の先には常に人がいて、人と人とのつながりを目的とし、そのための場や機会の提供を活動としてきた。

5月、現地に入り車窓から見える被災地の様子は、私にはまだ現実とは思えず、テレビの映像を見ている気分だった。しかし、車を降りて自分の足で立ってみると、魚の腐った異臭とともに、いままで「瓦礫」の山だと思っていたものの一つ一つが、電化製品やアルバム・本・鍵盤ハーモニカ…。それらはもともと誰かの持ち物で、大切な思い出の詰まったものだったと思うと、「瓦礫」と呼べるものではないと思った。活動は主に避難所の聞き取り調査を行った。数人から数百人まで避難所の規模も運営の仕方も様々で避難所ごとにニーズも大きく違い、緊急支援の今、ボランティアとしてどこまで応えていくべきか考えさせられた。

10月、「瓦礫」の山だった場所の大部分は片づいて、全壊となった建物の取り壊しも進み“何もない”という印象だった。5月からの時間の経過を感じ“復興”という言葉が頭に浮かんだ。しかし、地盤沈下など新たな問題があることも知った。活動の一つとして仮設住宅の方と一緒に干し柿作りを行った。仮設住宅内でのコミュニティー形成を目的とした活動であった。仮設内からは20名程の人の参加があり約1000個の干し柿を作るために皆で協力した。その中で作り方を教えたり教わったりと、住民同士の会話が自然と生まれ、皆が笑顔で生き生きとした表情をしていた。

12月3度目の大船渡は私には大きな「希望」に満ちているように見えた。津波に飲まれた地域にも、プレハブの店が立ち並んでおり、そこで商いをしている人々がいた。津波後に建て直された家やスーパー、ホテルな

どもあった。今はまだ仮の店舗で店が狭いなど問題も多いが、1度は津波に飲まれ、全てが壊され何もなくなった場所に人がまた戻ってきているということが、私にはとても嬉しかった。活動はベンチ作りや追跡調査を行った。追跡調査では以前に聞き取りを行った同じ人に、1年後の今、生活がどのように変化したかを尋ねて歩いた。家庭ごとに抱えている問題や仮設住宅を出てからの生活など状況が大きく違い、どこにも発散できない今後の不安を抱えている人が多くみられるような気がした。

私は初めて被災地へ行った時からボランティアとはなんだろう？という疑問が頭の中を渦巻いていた。自発的に無償で労働力を提供すること？なにかをしてあげること…？どれも何かが違うような気がしていた。1年半にわたる活動の中で私なりに答えを出すとするならばボランティアとは「被災地の人と真摯に向き合うこと。」それは被災地へ行って直接何かをするだけではなく、被災地から遠く離れた所でもできること。現地の人のことを考え、向き合っていく。それこそがボランティアというものなのかな？と思った。



『酪農学園大学生の受け入れを通して』



アプカス国内事務所事務局長
酪農学園大学食環境学群特任研究員

伊藤 俊介



2011年4月より、当会の石巻、気仙沼を始めとする支援活動に、大きく4つの時期に分けて、のべ100名を超える酪農学園大学の学生が大学からの公的派遣という形で参加してくれました。

我々の活動地も高齢化がもともと進んでいる地域であるため、若者の存在自体が、地域の人々を明るくしたり、繋げたりする副次的な効果がありました。また、拠点では、他大学の学生や専門家、国際協力関係者、経験豊富な長期ボランティアなどと時間を共にすることも多く、大学の中では出会えない人々との交流を通して、職業観や人間観が深まったという学生本人へのプラスの効果も多く聞きました。

学生の皆さんへのメッセージとしては、「今回の経験を焦らず消化して、自分の軸の一つにしてほしい」と思います。国内外を問わず、災害の現場では、元来、社会がやんわり包み隠しているものが、顕在化し、我々の前に現れます。そして、一方でそれが現在進行形で我々に開かれ、試されます。それこそが、多くの派遣学生が「滞在時の心を揺さぶられる経験」をした土台にあったのではないかと思います。

滞在時に経験したすべてを理解する必要は、もちろんありません。ただ、何か大事なことを決める時、自分が逆境の中にある時に、被災地で見た景色や空気感、出

会った人の顔、毎日の感情の揺れ動きが、一瞬でも頭をよぎり、思いを馳せてくれれば嬉しいと思います。日常を飛び出し、被災地や被災された皆さんと触れたことが、心静かに考える時にふと浮かんでくる「原風景」、さらに自分を見る時の「鏡」の一つを構成するものになってくれば、きっと被災地の現場に来た意味はあったのだと思います。

結びに。アプカスの気仙沼での活動はもう少し続く予定ですので、機会があれば、またぜひ東北へ足を運んでください。継続的にかかわることでしか見えないことは、多々あると思います。



酪農学園大学学生の支援活動概要

	期間	支援対象地/拠点	フェーズ	当会の主な支援事業
第1期	2011年4月～6月	宮城県全土/石巻市	緊急支援後期～応急復旧期	・物資支援 ・情報支援
第2期	2011年10月～12月	気仙沼市および石巻市/ 気仙沼市本吉町	避難所解消期・仮設居住 期初期	・仮設住宅の住環境改善 (断熱改善) ・集会所の建設
第3～4期	2012年7月～12月	気仙沼市/気仙沼市本吉町	仮設居住期中期・復興期	・共同農園の運営 ・仮設住宅の住環境改善 (緑化・エコ化) ・交流イベントの実施

「蒔かれた種」



特定非営利活動法人 チャイルド・ファンド・ジャパン緊急復興支援事業 プロジェクトマネージャー

船戸 義和



あの日、君たちは何を感じ、思ったのか。次第に明らかになった想像を絶する被害に、誰もが圧倒された。しかし、我に返って「被災した人のために何かしたい」という思いを抱いた人は少なくなかっただろう。その思いは支援活動の原点だ。立場こそ違うものの、私もその一人だった。

酪農学園大学は高橋一先生を中心に、学生をボランティアとして派遣することを決め、私はチャイルド・ファンド・ジャパンの現地統括職員として岩手県大船渡市に赴いた。学生は被災者と直接関わる支援の担い手として、私は支援の在り方を現地で見極める者として、共に活動をはじめた。

経験は少ないものの、大きなやる気と周りを元気にする若いエネルギーを備えた学生たちは、被災地に活気を運んだ。しかし、それだけでは足りない。目指したのは「本当に被災者のためになる活動」である。配布した物資は役立っているのか、その配り方は適切だったのか、被災した人と何を話し、どう向き合ったのか、といった質問を何度もぶつけた。そして「被災者のため」とは、実際何をすることなのか——例えば仮設住宅で「話し相手がいなくて寂しい」と言うお年寄りに出会ったら——。

学生たちには、100%の力を使って自分の頭で考え、行動することを求めた。彼ら自身が活動の本質を理解していなければ目指す活動には到底近づけず、場合によっては支援活動に参加した、という自己満足に終始してしまうからだ。自己満足的活動の中心に被災者はいない。

毎晩のミーティングで活動を振り返り、方向性を確認する作業が続いた。学生たちは昼間の活動と共に夜のミーティングも精力的に行い、他人の意見に耳を傾けることによって自分の行動や論理を多角的に分析し、活動への理解を深めた。その結果、1週間という限られた期間にもかかわらず驚くほどの成長で活動を支えた学生が多く現れたことは、非常に頼もしく感じた。アイデア

を出し合い、迷いながらも自分の責任において行動する姿から、私自身も活力を得た。「寂しい」と言うお年寄りの話し相手となるのは誰であるべきか。被災者の自立とそのためのコミュニティづくりについて、理解を深めながら行った「ベンチづくり」や「友結(ゆうゆう)ファーム(共同菜園)」の活動だった。

1週間の活動では短い、と感じながら帰路についた学生も多くいたはずだ。ボランティアとして、支援者として、被災した人のためにできることは少ない。しかし、現地での活動を終えて江別に戻り、自分たちに「できること」を考え、実行に移した結果のひとつが「酪ネット」だった。その設立と運営に大船渡市で活動を共にした多くの学生が関わったことを誇りに思う。学生が主体となって一定数のボランティアを長期間派遣したことは大変意義深い。

つまり、個人的な1週間の「event」が年単位の「movement」へと発展したのだ。ボランティアに参加したそれぞれの学生には、現地での活動に主体的に関わることで、その後の自分を無限に成長させることのできる「種」が蒔かれた。これは今回の活動の最大の副産物だ。種が成長し、酪ネットという木になって活動が支えられたことは素晴らしい循環だった。

そして、私たちが被災地で行った活動もまた、復興への種まきであったように感じる。様々なサポートを得ながらも、種を成長させることができるのは復興の主役である被災者だ。

活動においては、個々人の取り組み方、準備・運営等で多くの課題があったことも、もちろん覚えておかなければならない。しかしその上で、参加した学生が「蒔かれた種」をそれぞれ大きく成長させ、将来の社会を支える「木」へと発展させることを期待したい。そして、何年後かに復興を遂げた大船渡市を共に訪れたいと願う。



東日本大震災「後」を担う若い人々に期待する

— 酪農学園学生ネットワークの活動を傍らで見守って感じたこと —

酪農学園大学 キリスト教NGO論研究室 高橋 一



2011.3.11東日本大震災後、当初の大学主導による活動を引き継ぐ形で、酪農学園大生による自主的な支援活動グループである酪農学園学生ネットワーク（酪ネット）が生まれ、2011年9月から現在に至るまで、この酪ネットを主体とした支援ボランティア活動が、被災地の大船渡と石巻／気仙沼でNGO・NPOとの協働によって続けられてきた。筆者は一教員として、酪ネットの活動を傍らからサポートしてきた。

そのような立場にあった者として、学生ボランティア活動における「もう一つの大学教育的意義」をあらためて考えさせられたので記しておきたい。

それは一口に言えば、震災支援ボランティア活動によって、学生は大学における「知の主体」「倫理の主体」の触発と形成という課題を真正面から受け止めることになったのではないかということである。

東日本大震災と福島第一原発事故は、《近代日本の総体》がまるごと問われた出来事であった。震災「後」の諸課題を担うのは、若い人たちである。震災から何を学び、また学ばなければならないのか。その課題に立ち向かうために、「知の主体」をいかに形成し確立するのか。震災で犠牲になった（今なお困難を強いられている）多くの人々の喪失感に応える「倫理の主体」を自らの中にどう築くのか。そのためにこそ、学生は被災地と

いう現場に赴いたのではなかったか。

被災地での支援活動に参加した学生は、座学的な理解ではなく、五感のすべてを用いて理解し応答する姿勢が求められた。夜には現地NGO・NPOのコーディネーターとともに、その日の被災現場や仮設住宅での活動を振り返る際、時には数時間かけて他者の言葉に耳を傾け、また自らの思いを言語化する作業を行った。被災地では知的・倫理的主体の発動を、一人一人が極限的な時空間で促されたのである。

その意味では東日本大震災支援ボランティア活動自体が、大学における知的・倫理的主体の触発と形成という、現在大学で求められている「知の開発」過程だった。

東日本大震災はまだ終わっていない。

震災で犠牲になり、忘れ去られ、さらには原発事故で今なお人知れぬ苦難を強いられている多くの人々に「共感する知性」を持った担い手となるために、またその「知の主体」を実際に活かし、「行動する倫理」の主体形成と確立のためにも、被災地という現場での継続的な活動を多くの酪農学園大生にこれからも勧めたいと思う。それこそが真の意味における「実学教育」に他ならないと思うからである。

及ばずながら私も、震災支援活動に取り組んだ酪ネットの軌跡を忘れず、酪農学園大学を離れてからもささやかながらこの課題に取り組んでいきたいと願っている。



酪ネットの取組みについて

学生部事務次長 赤尾 全廣



2011年3月11日の東日本大震災発生直後、被災地でのボランティアに参加したいという学生の思いや、NGO・NPO団体が現地での支援活動を取り組む中で、継続的に関われる人材を必要としていた。そして、大学として東日本大震災への学生のボランティア参加は、重要な取り組みであるとの考えから、三者の思いが一致して、大学が支援する学生ボランティアがスタートした。4月上旬のことであった。4月15日～7月3日まで継続されたボランティア参加者の中に、“この活動は今後も継続する必要がある”との思いが、多くの学生から寄せられ、それらを受け止める組織として「酪ネット」（酪農学園学生ネットワーク）が立ち上がった。

酪ネットの目的である“今自分たちが取り組みたいこと”を実際に実行していくことは、大変な労力と困難があったと思われる。2011年度後期以降のボランティアは、赤い羽根共同募金の支援を受け、酪ネット独自で企

画・立案・運営した活動は、素晴らしい取り組みであったと高く評価したい。

2012年12月7日（金）に起きた、三陸沖でのマグニチュード7.3の地震の際、気仙沼では津波警報が発令され、安否確認や今後の動きを、それぞれの立場で当事者に連絡してしまっ。今後の課題としては、緊急事態での指揮系統をもっと具体的に打ち合わせる必要がある。



震災支援ボランティアの公認欠席について

教育センター教務1課 入江 遥



東日本大震災に伴う学生のボランティア活動については文部科学省通知により、被災地ボランティア活動を希望する学生が安心して参加できるよう、修学上の配慮が各高等教育機関に要請されておりました。本ボランティア活動は、酪農学園学生ネットワークを主体とした学生の自主的な活動ではありますが、震災支援という格別な活動として、酪農学園大学の学生が行うプロジェクトとして社会的に認識もされていることや、参加する学生が特定の学類・学科や学年に限定されず全学的な学生参加が行われていることなどからボランティア活動期間の授業欠席については公認欠席として取り扱うこととされました。

公認欠席期間は月～金曜日の5日間。土曜日に補講がある場合はその授業も含み、定期試験を実施の場合は追試験の対象とされました。

2011年度の前学期68名、後学期80名、2012年度前学期60名、後学期27名の学生が公認欠席を利用しました。

教務1課としましては事務的なことしか出来ませんが、ワークショップや報告会にお誘いいただけ、学生の皆さんが活動に取組む姿を拝見することが出来、大変貴重な機会を頂けたことを嬉しく思います。

本ボランティア活動は東日本大震災において何かをしたいと考えている学生だけでなく、教職員の気持ちの拠り所でもあると思いますので、これからも活動や思いを引き継いで欲しいと存じます。



被災地の方々からのお手紙

畑中さんご夫妻

いろいろな学生がばらばらと来てくれてなかなか名前を覚えられなかったけど、来てくれると嬉しかった。

産業祭の時には多くの学生に関われたことが思い出に残っていて、多くの方が家に泊まったのも懐かしい思い出。

遠く北海道から若い学生が支援に来てくれて、良い刺激になった。今後、派遣がなくなるとしたら寂しい。

また、支援だけでなく交流の場としてまた家を訪ねて欲しい。



津谷小での意見です。

いろいろ覚えていて、印象に残った学生との思い出を話されていました。

(名前は覚えてないけど、あの子はどうだった、など)

みんな来てくれた学生は素直で良い子だった、と言っていました。

プチプチを貼ってくれたり、地域に貢献してくれてとてもお世話になり感謝しているとのこと。

などどちらも学生の派遣に関して前向きな感想をいただきました。



Thank you for heartfelt feeling

■ プロジェクト資金を拠出していただいた団体・個人

- ・ 赤い羽根共同募金 災害ボランティア・NPOサポート募金
- ・ 酪農学園大学キリスト教NGO論研究室 高橋 一 教授
- ・ 酪農学園大学学生部
- ・ 一成会（酪農学園大学一期生）
- ・ 酪農学園大学学園長 原田 勇
- ・ 酪農学園大学教育学研究室 安宅仁人 講師
- ・ 妙選寺
- ・ 白樺祭チャリティーバザーの収益金
- ・ 日本キリスト教団北海教区
- ・ 日本キリスト教団札幌北光教会
- ・ 日本キリスト教団十二使徒教会
- ・ 日本キリスト教団手宮教会 榮まり子
- ・ 酪農学園大学3寮合同クリスマス礼拝献金
- ・ 酪農学園大学学生部学生課 課長 松田浩治
- ・ 酪農学園大学食品科学科 白樺祭収益金
- ・ 酪農学園大学食と健康学類2年 森島 優
- ・ 酪農学園大学臨床栄養管理学研究室
石井智美 教授 クッキー収益金

■ 協賛

- ・ NPO法人 APCAS
- ・ NPO法人 Child Fund Japan
- ・ 酪農学園大学教職員・学生課・教務1課・学園広報室
- ・ 社会福祉法人北海道リハビリー

■ 酪農学園学生ネットワーク 現地派遣部門メンバー

- 統 括：河村 将芳
会 計：中村 かれん
現地調整：中村 かれん 西井 亮太 竹本 愛
学生調整：平沢 拓馬 三原理緒 佐藤 斗紀
広 報：中尾 岳陽 平野 琴美
崎田 はるか 佐々木 智代

※敬称略





2012年 酪農学園学生ネットワーク活動総括
～東日本大震災におけるボランティア活動～